

数年前の定休日だった。友人のEさんが末期の悪性腫瘍で、あと余命いくばくもないという知らせを受けて、東京・杉並の病院に駆けつけた。

病室でうつらうつらしていた彼女は、わたしを見るなり「美味しいもの、もってきてくれた？」と酸素マスクを自分ではずした。

1年ぶりの再会だったが、別に衰弱しているふうには見えなかったし、顔色もよかった。

「医者が、余命あと1ヶ月だって言うから、腹がたって、ヒレカツ食べたわ」「えっ？ ヒレカツ？」

「そうよ、すかっとしたわ。そこの冷蔵庫にアイスクリームが入っているから、いっしょに食べない？きのう、届いたばかり」「お腹が冷えちゃうから、遠慮するわ」と言ったのは、わたしのほう。

「どっちが病人だか、わかりやしない」冷蔵庫からとりだしたハーゲンダッツの抹茶味を、Eさんは大きなスプーンで、実に美味しそうに口に運んだ。

その食べっぷりに安心するわたしに、「今度、電話で食べたいものを言うから、もってきてくれる？」と言って、また酸素マスクを自分でつけた。

そして、その数時間後、わたしが真夜中に帰宅してまもなく、彼女が亡くなったとの知らせをうけた。

見舞ったつもりの者が、死に逝く者に見舞われて、今、元気に生きている。見送ったのは、彼女のほうだ。